

「菊と刀」の視点で見る日本人選手のメンタリティー

一 日本人選手の決定力不足を理解する一試論 一

○中野 敬三 (有限会社中野情報技術研究所)

キーワード：サッカー，チーム作り，メンタリティー

【緒言】

サッカーにおいて、日本人選手はチームワークにも優れ、個人的な技術も評価されておりますが、決定力不足が問題とされております。日本人選手の決定力不足を日本の文化・社会面からメンタリティーを分析し、解決策を提示する試みです。

【方法】

ルース・ベネディクトは「菊と刀」で、日本と欧米の子育ての違いを分析し、その違いを底の広いなべ型の生活曲線で説明しております。この分析結果を基に、精神分析の一手法である交流分析の考え方を応用して、欧米人と日本人のメンタリティーの違いを分析し、日本人の決定力不足の原因と解決策を考えます。

【結果と考察】

欧米の乳児は規律の中で育てられます。決まった時間の授乳と就寝の習慣や、キリスト教の教義に従った生活などは、子供の我儘や甘えを容認しません。欧米の子供達は自立することを求められ、自立のために最大限の努力を発揮することが要求されます。

日本の乳児は自分の要求が満たされて育ちます。泣けば乳を飲め、何時でも寝ることができ、自由と甘えが三つ子の魂となります。日本人の子供は成長するに従い、社会規範を学び、自分の行動を抑制します。

この様子を、「菊と刀」では、欧米では、子供時代は「拘束」の多い状態で育ち、成人するに従って「自由」に行動するように育てられるが、日本では、生まれたときに最大限の「自由」があり、成長するにしたがって「拘束」が増すと表現しています。

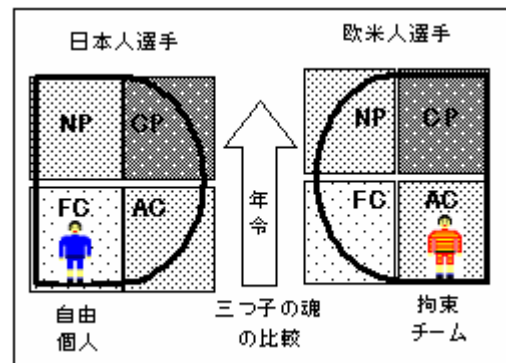
平尾誠二氏は著書「日本型思考法ではもう勝てない」の中で、意志の強さの違いをラグビーを例にとり、日本人選手はしんどくなってくると途中で自分に妥協してしまうが、ニュージーランド選手は自分に対する妥協は絶対しないという趣旨のことを述べております。

交流分析では、人間は子供の心(C)と親の心(P)と大人の心(A)の3つの自我状態があると考えます。

子供の心(C)は、自由な子供 (Free Child、FC) と順応する子供 (Adapted Child、AC) に分けられます。

親の心(P)は、批判的な親 (Critical Parent、CP) と保護的な親 (Nurturing Parent、NP) に分けられます。

日本人選手と欧米選手の違いを交流分析の考えで表すと、下図のように表現できます。



欧米人は、拘束(AC)から出発して自由(FC)へ向かうために、自立の精神と自発的行動が求められます。

日本人は、自由(FC)から出発して拘束(AC)へ向かうために、協調の精神と抑制的行動が求められます。

自由と甘えの心(FC)を持つ日本人選手は、身の安全を守る本能から、失敗のリスクが大きいシュートにチャレンジするより、周りの選手にパスをして、失敗を回避するという行動を選択すると考えられます。

危険回避について、湯浅健二氏は、著書「日本人はなぜシュートを打たないのか？」の中で、「不自然なほどに失敗を恐れる日本人」と述べております。

失敗を恐れずにシュートをするには、協調の精神をチームのためのチャレンジ精神に進化させ、ワン・フォー・オールの高い責任感とチームの一員として役割を果たす義務感を持ってプレーする必要があります。

意志を弱める甘えの気持ちを抑えて、自立した選手としてチームの規律を守り、チームへの貢献を第一に考え、状況にあった適切なプレーを自発的に行う習慣をつけ、最大限の努力で自分の責任を果たすチーム・スピリットを育てることが大切だと考えられます。

【結言】

日本人選手が、危険回避の欲求を抑えて、失敗のリスクの大きいシュートにチャレンジするには、ワン・フォー・オールの高い気持ちを持つことが大切です。

苦しいプレスなども重要なチームプレーであることを教え、試合や練習でチームの一員として自分の役割を強い気持ちで果たすよう指導することが大切です。